

1957年



初めて中国を訪問した中島健蔵理事長(左二)は、北京滞在中、当協会常任理事で写真家の「渡辺義雄写真展」に出席し、開幕式であいさつを述べた。中島京子夫人(右三)、楚図南氏(右二)、石少華中国撮影学会主席(右一)と。通訳する対外文化協会の蘇琦氏(左一)

——1957年11月



アジア映画週間が中国の十大都市で開かれ、14カ国が参加した。日本からは作品「米」が出品された。周恩来総理(左一)は、同映画週間参加日本代表団の牛原虚彦(右一)、望月優子(右二)、進藤誠吾(右三)の諸氏と会見した

——1957年9月7日

右派闘争が本格化、毛主席が「人民内部の矛盾を正しく処理する問題について」と題する講話を発表した。当協会は、創立二年目のこの年も、文学、演劇、映画、考古、科学、学術、スポーツ

ツなどの分野で多彩な交流を精力的に実施した。十一月、中島健蔵理事長が初めて中国を訪問した。
〔五七年の主な交流〕
◎1月 日本アイスホッケー選手団(鬼鞍弘起団長ら十七名) 訪中。中華全国体育総会の招請。
◎2月 日本映画人代表団(牛原虚彦団長、今村貞雄、伊藤雄之助、岸旗江、佐伯啓三郎、田口助太郎らの諸氏) 訪中。中国人民対外文化協会、中国電影工作者連誼会の招請。

◎4月 訪中日本考古学視察団(原田淑人団長、杉村勇造、駒井和愛、水野清一、杉原莊介、関野雄、樋口隆康、岡崎敬、杉本吉吉、安保久武の諸氏) 訪中。中国科学院の招請。敦煌、殷墟などを訪問。周恩来総理と会見。
◎5月 日本物理学者代表団(朝永振一郎団長 訪中。中国科学院の招請。原子核、宇宙線、素粒子、応用物理などに分かれ交流。日本スポーツ界代表団(松沢一鶴、栗本義彦、竹腰重丸、織田幹雄、鹿子木健日子らの諸氏) 訪中。

本多秋五の諸氏) 訪中。
◎11月 中国書道展開幕(日本橋高島屋)。日中文化交流協会、日本書道文化連合会、毎日新聞社主催。大阪、福岡、名古屋でも開催。中島健蔵理事長、中島京子夫人ら訪中、「文化交流に関する共同声明」に調印。中国人民対外文化協会の招請。渡辺義雄写真展開幕(北京ソ連展覧館)。中国人民対外文化協会、中国摄影学会主催。
◎12月 日本演劇家代表団(久保田万太郎団長、北条秀司、喜多村緑郎、喜多村九寿子、金子洋文、吉田謙吉、穴沢喜美男、宮口精二、倉林誠一郎の諸氏) 訪中。中国人民対外文化協会の招請。中国放送技術代表団(盧克勤団長、張振東、李英華の諸氏) 来日。日中文化交流協会が中日貿易会、NHK、民間放送連盟等と共同招請。中国敦煌芸術代表団(常書鴻、康大川、李承仙、崔泰山の諸氏) 来日。

◎6月 日本バレーボール選手団(岡田英雄団長ら十九名)、日本重量挙げ選手団(井口幸雄団長、野中乾監督ら八名) 訪中。早稲田大学水泳チームで山中毅選手らが訪中。
◎8月 アジア映画週間参加日本代表団(牛原虚彦、望月優子らの諸氏) 訪中。中国人民対外文化協会、中国電影工作者連誼会の招請。
◎10月 日本サッカー選手団(竹腰重丸団長ら二十二名) 訪中。日本作家代表団(井上靖、山本健吉、多田裕計、十返肇、中野重治、堀田善衛、

世の中は好景気だった。クリスマスケーキを片手にほろ酔いの群衆が、クラッカーを鳴らしながら銀座通りを闊歩していた。ボナスというものを貰ってみたい、いやその前に月給を貰いたいと思いが、日中文化交流誌の発行を財政上の理由からやめようという内部の異見と闘っているところだった。財政における冒険主義と敗北主義に陥らないためには、事務局員の月給を止めるぐらいしか方策がなかった。文化交流を止めるわけにはいかなかったのである。(九十九)



中国を訪れた中島健蔵夫妻は、劇作家の欧陽予倩氏を自宅に訪ね親交を深めた。左から欧陽予倩氏、著名な詩人でもある劉韻秋夫人、中島京子夫人 ——1957年11月 北京 中島健蔵氏撮影



日本作家代表团として戦後初めての中国訪問に旅立つ(左から)井上靖、十返肇、山本健吉の諸氏 ——1957年10月26日 東京



日本考古学視察団が訪中 約一カ月半にわたり、北京、敦煌、蘭州、成都、洛陽はじめ十七都市を訪れ、各地の博物館、遺跡、発掘現場などを参観、研究者と交流した。原田淑人団長をはじめ一行は帰国後、報告会で講演を行なった ——1957年6月19日 東京・三越劇場



訪中した日本作家代表团の中野重治(左)、堀田善衛両氏

——1957年11月10日 北京 中島健蔵氏撮影

中国書道展が開幕 中国の代表的な書家八十九人の作品が展覧された。同展東京展には、六日間にわたる会期中、書道関係者だけでなく、美術愛好家や学生など各界各層からおよそ一万人が来場し、連日にぎわった

——一九五七年十一月 東京・日本橋高島屋





中国敦煌芸術展が東京・日本橋高島屋で開幕 日中文化交流協会が創立とともに準備を進めていたもので、同展は大好評を博し、連日、8階の会場から建物の外まで入場者の列が続くほど盛況であった
——1958年1月

1958年

岸内閣の反中国政策の影響を受け、五月に長崎国旗事件が生じて貿易関係が途絶するなど、日中関係は最悪の状態が続いた。八月、周総理が日中関係政治三原則を提示。中国では社会主義建設の総路線が採択され、大躍進、人民公社化が大々的に展開された。そのような状況の中、日中文化交流は多彩に繰り広げられた。当協会は一月に中国敦煌芸術展を東京

で開催、新中国成立以来、日本における初めての文物展であり、画期的な展覧会として大成功を収めた。さらに、尾形光琳記念展の北京開催のほか、美術、書道、舞踊など文化各界代表団の往来が行なわれた。

五八年の主な交流

◎1月 中国敦煌芸術展、東京・高島屋で開催。日中文化交流協会、毎日新聞社主催。同展工作団(常書鴻団長、康大川、李承仙、崔泰山の諸氏)来日(五年十二月)。引き続き京都展開幕。

◎2月 日中交換書道展「日本書道展」(北京北海公園)開幕。同展は、済南、蘇州などでも開催。日本での「中国書道展」(日中文化交流協会など主催)は、前年に続き、日本各地で開催。

◎3月 松山バレエ団訪中(土方与志顧問、清水正夫団長、松山樹子副団長)一行四十六名出発。中国人民対外文化協会の招請。北京、重慶、武漢、上海で、「白毛女」、「日本民舞集」等公演。

◎4月 中国歌舞団(呂驥団長)五十名来日。東京、名古屋、大阪、神戸、福岡、北九州で公演。日中文化交流協会、毎日新聞社が招請。長崎国旗事件のため、最後の公演をキャンセルし帰国。



「中国敦煌芸術展」工作団として前年来日、東京、京都での展覧を成功裏に終え、帰国の途につく。(左から)康大川、崔泰山、常書鴻団長、李承仙夫人の諸氏——一九五八年一月二十一日 羽田

◎5月 日本書道家代表団(豊道春海団長、近藤秋篁、江川碧潭、安東聖空、炭山南木、松井如流、松丸東魚、平尾孤往、香川峯雲、金子鷗亭、村上三島、青山杉雨らの諸氏)訪中。中国人民対外文化協会の招請。

◎6月 花柳徳兵衛日本舞踊団(花柳徳兵衛団長)四十六名訪中。中国人民対外文化協会の招請。北京、天津などで公演。

◎7月 中国写真展、東京で開催。日中文化交流協会、日本写真家協会など主催。静岡、仙台、大阪でも開催。

◎9月 尾形光琳記念展訪中日本代表団(中川一政団長、千田是也、白土吾夫、石井鶴三らの諸氏)訪中。中国美術家協会等の招請。中国美術館での開幕式に出席。北京で周恩来総理と会見。

◎10月 東京で日中文化交流関係懇談会準備会議。世話人中島健蔵、青野季吉、亀井勝一郎、倉林誠一郎、白石凡、関野雄、花柳徳兵衛、福田豊四郎、本多秋五、山本健吉、吉野源三郎らの諸氏。

長崎国旗事件によって、交流は重大な影響を受けざるを得ない事態に立ち至った。当協会は六月十四日声明を発表し、「日本と中国との関係を悪化させたことについては、ただに政府のみならず、われわれ国民もまたひとしくその責任を負わねばならぬ」と述べ、「日本国民の自立的反省」を求め、「いつさいを政府の責任に帰しその態度の是正を求めることにのみ努力を傾ける」当時の日中友好社会の一部の風潮を痛烈に批判し物議をかもししたが、結局は大勢を制するに至った。白土事務局長(当時)の第一回の訪中はこの年九月、今後の文化交流の在り方を協議し、前進座と新劇五劇団の訪中公演の可能性と方策を探求するためであった。(九十九)



中国側が制作した尾形光琳記念展の宣伝ポスター



光琳生誕300年記念展の開幕式で（前列右から）中川一政団長、千田是也副団長、石井鶴三、谷信一、水沢澄夫各代表、白土吾夫、張奚若外交学会会長、陽翰笙対外文協副会長の諸氏。白土氏にとって、これが初訪中だった

——1958年10月16日 北京



松山バレエ団が初めて訪中し、北京をはじめ各地で公演を行なった。バレエ「白毛女」の松山樹子氏(左)と歌劇「白毛女」の王昆氏。当時二人の喜兇として話題となった

——1958年3月 北京 松山バレエ団提供



長崎国旗事件により、政治的緊張に加え、文化交流も重大な影響を受けざるをえなかった。そうした中、花柳徳兵衛日本舞踊団が訪中、各地で歓迎を受けた。呂驥氏(中)と再会を喜ぶ花柳徳兵衛団長(右)

——1958年6月25日 北京 中島健蔵氏撮影

初の日本書道代表団が訪中 長崎国旗事件直後であつたにもかかわらず、広州、武漢、北京などを訪問し、各地で盛大な歓迎を受けた。北京の故宮博物院奉先殿で日本から携えていった大筆を用い、特技の「双手廻腕法」で「和平友好」と揮毫する豊道慶中(春海)団長

——一九五八年五月二十九日

